

タイトル	チベット探検の先駆者「能海寛」の生涯と業績
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第6号
ページ	31－51
発行年	1999.3.20
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の錬磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

「能海 寛」の生涯と業績

能海研究委員会

隅 田 正 三

1、おいたち

今から100年前の明治31年にチベット探検に赴き世界に、その名を知らしめた学僧・能海寛は明治元年5月18日島根県那賀郡金城町長田の真宗大谷派天頂山浄蓮寺（当時の檀家数390戸）で父法幢・母ユクノの次男として誕生した僧侶である。寛は生涯にわたって3人の父（徳言・法幢・謙信）をもつこととなる。

兄弟は（兄の千代摩（法言）、寛（法流）、妹のハツ（初子）、弟の齊（齊入）、義妹のスエ（末子）、弟の登（啓乗））の6人であった。

父の法幢師が明治8年8月16日、夏風邪の悪化で他界した事により、同年12月4日には三番目の父謙信師が娘のスエ（末子）を連れて有福村大金（現浜田市大金町）谷家から入寺したことにより、寛は広島県山県郡芸北町の専光寺（父の生家）で養育されることとなった。

2、仏門への旅立ち

明治10年6月12日には広島小教校へ入学し、3年間漢書を学んだ。桑門巖氏とは無二の親友として生涯に互って親交を深めた。その間に明治12年10月28日（11歳）で京都真宗東派本山本願寺住職大谷光勝法主から浄蓮寺衆徒仍授牒が授けられて得度した。得度の様子は「得度ニ付道中及入拂帳」により寛の利発な姿が浮かんでくる。「収入の部」母、兄、檀家より27円38銭。

「支出の部」宿代14銭、舟代18銭、ぞうり代7厘、汽車代20銭、印かん代1銭、数珠代15銭、記念写真代15銭、笛代6銭、食事代6銭、下駄5銭、そば2銭、経本56銭など小計10円14銭5厘。と詳しく記述している。また、明治31年5月には、これまでに使用した経費を詳しく記している。明治12年得度入費



幼少(11才)の得度写真



「得度ニ付道中及入拂帳」

11円43銭5厘、明治28年余間継席10円、院家整理104円、明治31年法衣新調50円、明治31年法服七条125円50銭、法衣新調70円、合計370円93銭5厘。明治18年から31年4月までの経費967円65銭5厘。総合計1338円59銭。と几帳面に記録しているのである。

そして寛は、明治14年に郷里に帰って来た。浄蓮寺では教導師としての義父・謙信から将来性を見込まれた寛は後継住職としての期待を一身に担い厳しい教育を受けた。故郷にあっては4年間、法務に専念する傍ら毎年の夏場には浜田町(現時)の石見学場(現時・禮部と六時)にて宗教家としての基礎的な勉強をした。



天竺浄蓮寺

3、向学心に燃えて

明治18年9月16日に再び広島教校に入学する。広島教校では、高僧和讃、三国伝、通縁起、十八史略などを学ぶ。12月20日の試験を以て閉校となり、21日より6丁目桑門方へ寄留して越年し1月15日まで過ごす。帰郷したのは19日から22日の4日間で、23日には広島迄と偽り浄蓮寺を発った。この時、寛の手持ちのお金は11円余りで父からも1円をいただいていた。途中専光寺で二泊、庄原喜作宅で一泊、桑門宅で三泊した。

29日夜、広島港からサキキ丸に乗船31日朝、大阪着、正午に京都・新町の友人桑門巖宅へ到着し寄留する。3月5日の京都普通教校への入学を待つ。京都普通教校の入学に当たっては豊島勝太郎氏が請人となり明治22年12月まで在京し英学、普通学、佛学等を学んだ。

3月17日までは、車中筋御前道上ル分舎宿、18日から本舎寄宿となり東寮3号室で伯耆の垣山清、近江の蚊野仙次郎、紀伊の小池智覚の4人が同室であった。

5月29日、寛は「反省有志会員」第85号として入会している。会の大意は「一 禁酒ノ事、一 猥褻ノ場所ニ立入ル可ラス」とある。

6月11日、コレラの流行により、学校は閉校となり、寛は一時、帰郷することとなる。12日、大阪港を発ち翌13日広島港へ到着。3丁目野田宅で二泊、道中庄原で一泊、専光寺で二泊、18日に帰郷する。

再び、学校が再開されることとなり、9月10日出発した。広島までの途中は都志見で一泊。11日、加計から川舟で了川(お姉)、現在の太田川を下り慈仙寺の鼻(現在の平和公園)と言われる広島港の船着き場に着く。12日夜、広島港から乗

船、14日朝大阪港着。京都桑門宅で一泊。
15日に帰校する。

10月10日、反省会へ「誓約書」を出し、会員となりその後活発に活動する。学校が再開されて、そこで恩師となる南條文雄博士に出会い、梵語学研究の触発をうけ、19歳でチベット探検を公言し探検家「能海寛」としての旅立ちが始まった。西寮2号室の親友である蚊野僧次郎氏から「活眼」という激励文を受け取っていることから判断して明治19年10月23日に南條博士にチベット行きを公言したことが伺える。尤も南條博士も『能海寛遺稿』能海寛君略傳で「十九年本願寺派の普通教校に入りて、…君の西藏探検の志は已に此時より発起せり、…」と述べていることが裏付けとなる。

4、京都・普通教校時代

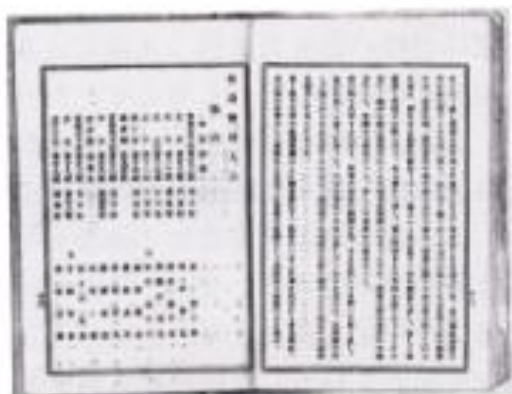
寛は、明治19年11月23日「ニュー・ナショナル第三読本」30章までの英文を直訳している。引き続き第二巻を12月31日に終えている。この頃の寛には、かなりの英文力があったものと思える。

『普通教校人士』の沿革記により略記すると「明治十八年四月十八日をもって西六條に開学する。教校の精神は僧俗を問わず宗派を分かつゝ遍く佛弟子を教育して広く同胞の拡張せんとする。仏教学校に外国人を聘用する。廿一年十二月廿五日大学林例の発布により学生の多くは四方八方に分散した。ましてや文学寮に残れる者は甚だ少なく……。」と述べている。明治18年開学以来823名の学籍名簿を見ることができる。この名簿の中には備後國の小林洵（後の高楠順次郎）、肥後國の東温謨、紀伊國の古川勇、越前國の中臣（梅原）融などの同窓生がいる。

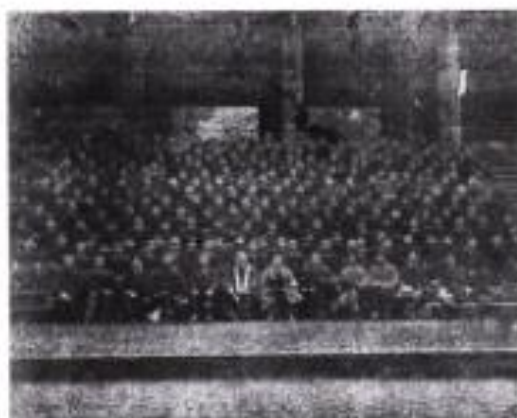
寛のチベット行きは、単なる思いつきではなかった。『世界に於ける佛教徒』第



「活眼」 蚊野僧次郎氏書



『普通教校人士』の一葉



「普通教校開校記念」 知照院にて(明治21. 12. 11)

十六章の「仏典翻訳」で理路整然と次のように述べている「英国の布教に於て、最も必要なるは仏典の翻訳なり。……普及せる言語に由りて、翻訳を始むべし。……国語多き中、予は、その第一着は英文に訳するにある……全世界人口の一〇分の一以上に及び就中英国中屈指の強盛なる英米の語なれば、これ最も必要なり。オルコット氏の仏教問答の如き、英文を以て、成る故、已に十五、六カ国の文に訳せられたり。かくのごとく、一度仏典も英文に訳せられるときは日ならずして、又諸国の語に訳せらるべし。……」と、世界五億仏教徒の結束をと、広大な考えをもっていた。又仏教を訳すには梵学と英学の二つに精通すべきであるとも述べている。

爾来、目的達成のため周到に語学と訓練に勤しんだ。明治20年3月3日、寛は本科初年級へ編入となる。18年頃から寛は宗教雑誌『佛教』『教學論集』『日本之教學』等を購読しており、その掲載されている論文の主なる執筆者（南條文雄、大内青巒、小栗栖香頂、井上圓了、島地黙雷、石川舜台など）を見ることができる。寛は当時の宗教界を担う人達に大きく触発され、自分も勉強して、将来は、これらの雑誌に寄稿したいと考えていたと思える。

寛は、夏休みを利用して明治20年7月13日午後より摂津国島下郡吹田村の直海玄祐氏を頼って親鸞の聖地福田の郷を訪問している。

20歳で小栗栖香頂に「論教」を学び、21歳で哲学館館外員となり講義録を取り寄せ2年間哲学、英語、梵語を学んだ。明治22年1月28日、寛は文学寮本科第二年甲生へ編入となる。2月1日には、第三十六號「文学寮在学中豫備金」参圓也を納めている。寛は同年5月10日から故郷へ帰郷していた。帰郷している寛当てにいろいろな手紙が届いた。5月7日付け笠原松二良氏から「真宗に能海あり…」という激励の手紙を貰う。5月30日付け大学林文学寮からの手紙は「当地寄留人として徴兵応じ当地域の補充員規則によりて十二月まで当地を去ってはならない。」と通告を受けている。7月19日付け西依金次郎氏からは「貴君この頃困難の地に隠れ良師を得て仏教の奥義を討究せられ居り由羨ましきの至り…」。西依の手紙から読み取れるものは、京都文学寮において当時は、仏教問題で学生運動が起こり、勉強の段でなかった事が伺える。7月27日付け摂津国の上田繁丸氏からは突然の帰郷による真意を知り「貴兄は将来必ず社会に知られる人となりて、以てまさに西山に衰滅せんとする仏教をして今日の基督教の如く仏教をして東山に□力せんとする一人なりと余は常に信ぜり…」と激励している。

どうしても大学林高等科を卒業したいという考えを持つ寛は故郷の檀家一統と後継住職となる契約（「預金銀-御勘」）を9月4日付けで結び、向こう四年半の学資金の支援（270圓0銭）を得て再び上京した。9月14日文学寮北京第六号室に入寮する。同室者は五名で、美濃国の久富米次郎、播磨国の村上寅吉、筑前国の西原莊十郎、阿波国の平尾一夫であった。

9月22日、寛は「河口君（慧海師）と会い『英文会』のこと一寸話す」と『春秋日記』に記している。堺の河口師とはいち早く京都で接触していたことが日記で読

み取れるのである。9月25日の日記では一週間のカリキュラムを書き残している。その中で外国人教師のセッパード氏、ランバート氏などの名前を見ることができる。

5、慶応義塾時代（英語学習）

この頃、友人たちは次々東京の大学で勉強するために上京していた。寛も学資金の目安もできたため、明治23年1月に東京に出て慶応義塾に入學した。後に父謙信に宛てた「懺悔の信書」で父に丁寧に詫言を入れているのでこの経緯を知ることができる。

明治23年1月17日付け父謙信師からの手紙は「慶応義塾への転学は世評として浄蓮寺住職としては宗学に志しなきは畢竟（結局）檀家教導の志しなきの証なり等檀家総代始め世評不聴。住職たる証が必要…」と父の苦しい立場を伝えている。

明治23年の『春秋日記』第四号、1月28日の記述では「英文を作り主義を述べんとす」と記し、翌29日の項には「英文を以て主義とすべし」と実践を開始して『Wisdom & Mercy』という英文日記 No. 1を草稿している。

1月30日～31日の記述によると「哲学館か、福沢の大学か」と、父の手紙を頭に持ちながら迷ったあげく慶応義塾に決したと記している。

しかし、慶応義塾は5～6年は必定と問題点（敵の4種をオーバーすること）を挙げている。

2月1日漸く慶応義塾で試験を受け、2月3日には「豫科二番の一」に入り授業を開始した。

「…福沢塾の後ヨリ富士ヲハルカニ望シテ実ニ白雪在派人彼レノ如ク秀テザル可ラス…」。2月10日の項では「予学成就ノ上ハ佛敎大学ヲハ設立シ諸宗合同シテ南條君ヲハ校長ニ命シ文学科ヲオク撰科ヲヲキテ佛学専門トナス生徒ハ僧俗ヲ撰バス資本ハ総本山及ビ仏徒トス」と将来展望も描いていた。2月19日「エドウキン・アーノルド令



『春秋日記』(明治22年9月22日)



『春秋日記』第4号の記述



E・アーノルドの添削した寛の通訳(英文)

娘ト共ニ福沢先生等数名来…。20日「クライブ傳十から音読ロイド」。21日「クライブ傳十より音読ウキリアム氏」。

24日「物理クライブ會話（今日はWeston英國人ニシテ種々話タリキ）」。25日「物理クライブ音読（今日ハFrancisト云宣教師ニテ首ニ金ノ十字ヲカケ教授セリ）」。26日「物理クライブ音読（ウエストン君）」。28日「物理クライブ音読（ウエストン新聞ヲモチ来リ追々ニ日本モ英字新聞ハ□ニナルコトナレハ読ミナルベシトテ良文ナリトテ英國ノダービシャー縣ノ新聞ヲモチ来リヨマセシコトヲ語々ハナス）」。これらを総合して考えると、福沢氏は慶応義塾に外国の宣教師を招き授業を行わせていたことが判るのである。

寛は、慶応義塾において福沢諭吉から大学を創設した本質について直接薫陶を得た。教官W・ウエストン（英國人）にはクライブ伝を学び授業中に世界共通語としての英語の重要性を再認識（『和訳記』）させられている。

E・アーノルドには個人的に親交を深め寛の漢詩を英訳して添削を仰ぎ4箇所添削を受け、アーノルドからは3月30日に日本の宗教に関する感想を述べた英詩文（『想に對る體に記』）を頂戴している。実際アーノルドから戴いたノート用紙にペンで書いた英文の詩の裏に寛は、

「英國大詩人アーノルド伯日本渡來東京滞在ノ節予も在京中ニテ飯倉之寓居ヲ訪ひ數語之後天下和順之經文英訳ヲ示シ此時ニ於テ此詩を直ニ作り予ニ与ヘラル、ものなり伯ノ直筆□□有難き物なり」 能海寛誌

と、記載されており、戴いたものは親愛なる弟の齊入に届けていたのである。

またA・ロイドからは英文を学んだ。これらを総合して見ると寛が従来考えていた世界に共通する英語をマスターすることと、外国人と直接生きた英会話を学ぼうとした姿勢が読み取れるのである。

明治23年11月5日には、「英語夜學會」に入会している。入会金壹円、授業



寛に与えたE・アーノルドの英詩



英詩に記された寛の寛書

料壹円、校費拾銭を支払って英語の勉強も精力的に行っていた。

明治19年10月改正の「慶應義塾社中之約束」によると正科（学業）を「豫科」と「本科」に分かつ。豫科終わって後本科に入らしむ。「正科」卒業まで凡そ5ヶ年とし、一年を三学期になし、一学期（1/11~4/25）、二学期（5/1~7/31）、三学期（9/11~12/25）とす。寛は学業の区切りを以て12月に退学したのである。また教員の職務の中に、「毎期の末大試業を為し其期中の勤惰表を編成す。」とある。

6、哲学館時代（東洋哲学を学ぶ）

しかし、チベット行きを目指す寛は本分とする東洋文化史を学ぶため哲学館（駐米館）へ明治24年1月に転入学し3年間学んだ。哲学館では井上圓了館主に見込まれ生涯に亘って親交を深めることとなる。寛の筆記している『講義口述録』には「應用心理學」（M25・9・21）、「忠孝活論」、「教育宗教關係論」、「妖怪學」、「実験教」など井上圓了博士の講義を記述したものがあり、特に『妖怪學』（M26・4・5）の口述では「妖怪ハ学科ナルカ何科ニ属スルカ 學術上ノ原理ヲ応用シテ未明ヲ説明スルモノユヘ學問之チツ序組織ヲ要ス 之ニ就テハ從來一ケノ学科タラザルユエ他日立派ノモノトナルベシ。」とあり、妖怪学が将来は確立することを念願していたと思える。寛は井上博士から民俗学的な考え方や影響を受け中国に渡っても旅行日記には民俗学的な記述が多いのもそのためと思える。

『春秋日記』第十六号の3月11日「雪二寸斗リフル趣町行ヲヤメ欠席セリ出時風邪 昨日井上圓了ノ巡回（註）ノ話シアリ…」、4月18日には、井上円了曰ク「學問ハ即チ品位高尚ニナスナリ」と講義の様子など日記に度々井上博士の名前が出てくる。

明治24年3月2日付け父謙信からの送金された手紙の余白に寛は「この書面仏説也頂拝敬礼す」と受領後に書き込んでいる。兄法言からの手紙も同封され「慶應義塾転学を惜しみつつも哲学館は是非卒業を…」と伝えている。7月1日には「普通科」の聴講を修了。同年10月6日には哲学館内に「哲學研究會」が設立され寛は、第一期会員として入会している様子が「證票」第150



哲学館の「講義録」



『世界に於ける仏教説』

號により確認できる。

明治25年7月1日には「高等下級」の聴講を修了。明治26年7月7日には「高等上級」の聴講を修了して、卒業論文『世界に於ける佛教徒』を発表する。それは、一世紀後も洞察する格調ある論文であった。同年11月には哲学書院より『世界に於ける佛教徒』を自費出版し、内務省の版權登録得る。大内青巖氏が序文を書いているのは格調高い内容が大内師の心を動かしたのであろう。寛は、「旧佛教破壊的文字」の文中において、『世界に於ける佛教徒』の「第六章道德上の佛教」並びに「第十七章本山政論（理論の方）」を特に重要視していた様子や「固ヨリ一宗一派ニ就テ論スルニ非ス」と数年後に述べている。また明治26年2月4日には學話を聴講し「純正哲學自解」などを記述している。

7、チベット探検の具現化を目指す

この間においても東北紀行(23年7月)、富士山単身登山(24年7月)、伊豆七島めぐり(25年8月)などチベット行きを想定しながらの訓練と体験を積んだ。寛は、富士山登山以来精力的に西藏国の調査を再開した。

また、明治24年から26年までの哲学館での時代は南條博士の私宅において学外勉強として梵語学に着手していた。

「予と西藏」(M30・5・9H)に「西藏入蔵目的は仏教經典の原本を得るため」「原本考究、歴史の探索は實地にすべきで、とくに釈尊正伝あるいは仏説を明らかにするためには仏教が滅んだインドよりも、むしろチベットへ行くべきである。」という。「インドに赴いている仏教研究者のほとんどは入蔵の志しをもっているが、成功した人がいない。自分はこれと違って四川省の道から入蔵を試みるのだ。(仏教が伝播した逆方向からたどることの意義を説く)。「欧米の学者はすでにチベット仏教を盛んに研究しているけれども日本の仏教者こそ、この方面の研究に取り組むべきで、早急にチベット探検をしなければならない」。「国際紛争の中でチベットは危急の渦中にあり、これを救済すべきは同じ仏教徒の日本人だ」と説く。「英・露・仏・支が衝突すればチベットは滅亡し、千年の伝統をもつ文化も廃れるだろう。人類学見地から人種、言語、風俗、政体などを研究するためにチベットに行かなければならない」。とのべている。明治20年以來、時代の氣運は盛り上がり、そうした風潮に影響され、自分もチベット探検を決心した。と記述している。



哲学館の「聴講証」

探検家の立場から世界の地理学上から最闇地帯のアフリカ中央部アジアの中央部であったが、アフリカは探検されたので、残る中央アジアのチベットこそ探検されなければならないと述べている。

明治27年1月3日、寛は人生の岐路に立ち郷里の寺で正月を過ごした。「口代(くちがひ)」という遺書にも代わる和綴じ本にチベット探検の心情を切々と記した。表紙の裏には「明治二十七年二月二十七日 前髪其毛ヲハ後ノ為メニ紙ニツツミ箱ニ入レ置予無事帰国セバ吉祥若シ業ノ為ニ死セハ遺体ト思ヒ御葬送ヲ……」(原文)とある。決死の覚悟であったことが伺える。

故郷にあっては法務の傍ら地域の青年集団を集めて「波佐俱樂部」を創立させ、自らは庶務を掌り地域の学習活動を根付かせた。中世・近世の郷土史年表の作成や倭約貯金を奨励したり、読みにくくなった寺の過去帳の書き換え作業や系図の整備など。特に地域の組毎に割り振り世界各国の研究と発表をさせていたことは、正に国際化を先駆けるものであった。友人にも海外に羽ばたこうと触発したのである。そして、友人の佐竹受氏はアメリカへ、弟の春谷登はハワイの本山別院へと渡航したのである。

明治23年『春秋日記』第廿四号二月一日で、「雪積ルコトハカルニ毫尺五寸余 能海寛 法名ヲ法流ト号ス 尔レトモ洞達又ハ神通 航雲トモ称セントス字ハ石峰、石岳、清陽、等ト称シ寛ヲハ寛ト改メントス 寛、充寛、法流、神通、洞達、航雲、航天、天頂山、石峰、石岳、清陽、心月堂主、自緒社ノ主タラントス 雷音モ予ノ名…」これに記述しているように雑誌『佛教』第百貳拾八號(明治30年7月15日)では「西藏國所傳釋尊入滅考異説」、及び同誌第百三拾五號(明治31年2月5日)では「苦樂逆諫」と、それぞれ「天頂山」のペンネームで寄稿しているのである。

明治27年1月7日付け子安善義氏からの手紙で「留蔵二年…西藏行きのご都合如何深く計等運び大成を期したまへ急行は顛覆(てんぷ)の恐れありと知りたまへ」と激励している。2月10日付け子安氏からは「一月二十日南條宅から帰山した旨



「口代(くちがひ)」の1頁



「波佐俱樂部」の1頁



「佛教記」の1頁

の報告と、寛の西藏探検の大目的のためには充分なる勉強をして多少の延日は終生の大事業のために必要」と述べている。また、4月8日付け三隅の岩本普満師からは「急がば回れの古諺を容して…住職補任を望むならば速やかに住職に任じて後代理を命じて自由に遊歴を企て…」とアドバイスをしている。

明治28年5月2日には本山へ整理献金をして寛は浄蓮寺餘間（院家）となり、父謙信を補佐して副住職を務める。同年7月には鳥根県益田市沖の離島・高島に渡り「寺子屋」を開いた。「教えることに依って、教える側が磨かれる。」と論文でも述べている寛自身の理念の実践であった。

月はいづくも 照らすなり 高島人も 同じ眺めよ

これら七首の和歌を詠んでいる。日中は子供たちに体操なども教え、夜は地区民に説教をしたり、島民と交流をした。

明治29年1月11日付け南條博士からの手紙で寛に「南條宅へ住み込み方の依頼と西藏行きの予備にも梵学の勉強に大奮発を…」と上京を促す内容であった。

3月1日、寛は再び上京して、恩師の南條文雄博士宅へ寄留し、梵語とチベット語を学ぶ傍ら明治30年4月1日からは、麹町牛河町の宮嶋大八氏の「私立支那語学校」の豫科で中国語を学んだ。

明治29年5月7日付で、本山渥美契縁執事宛てに、西藏国仏教探検の任命の「嘆願書」を提出し保護を訴えている。添付書類の「入蔵予定」によると、

第一 方法 先ツ清国ニ渡リ凡ソ一ケ年滞在致シ西藏ニ関スル参考書ヲ求メ又入蔵ノ手順ヲ正シ同伴者ヲ求メ喇嘛僧ト成リ商隊ニ混シテ進蔵ス準備致ス目算ニ御座候。

第二 順路 先ツ清国北京ニ着シ凡ソ一ケ年ノ後四川省ニ入り夫ヨリ打箭爐察木密多等ヲ通過シテ前蔵後蔵ノ首府ニ到着予定ノ段ニ御座候。

第三 年限 凡ソ往復及ビ滞蔵合計五年ノ予定ニ御座候。

第四 目的 地理、国体、仏教、言語、経典、仏具等ノ研究ヲ主眼ニ致居候。

第五 入費 渡清百円、在清百五十円、参考書百円、入蔵百円、帰途百五十円、合計六百円。

と綿密な計画を知ることができる。

「明治二十九年三月廿九日『虎枕日記』（自四月一日至十二月卅一日）於東廬庵天頂山石峯誌」の書き出し文章に「昨夢曰予跋涉亜細亜之中原忽值千千里之虎鳴呼

汝以不敵之勇猛横行蹂躪尤邊之原野予今去東海之孤島我身放于大陸之中樞予佛膽何分汝勇猛…（略）」とあることから28日の晩に虎の夢を見て日記の題名を付けたものと思える。

また、次のように、水泳法が四種類記されている。

- 1、亀泳き 亀のやうに手で水をかかせて足を打たす事。
- 2、手繰り泳き 胸郭を開いて手で円形を描き足は水をふんで行く。
- 3、早抜手泳き 左右の手を交々水上に掲げて水を掻き足は前と同じく水をふむ。
- 4、立泳来 姿勢を直立して左右の手を水上に掲げ両足は開いて交々に水をふむ。

とある。能海寛も水泳をマスターしていたことが伺われる。

同年5月9日「予ト西藏」を草稿し、「西藏国大藏經目錄」概要を訳出し翌10日に反省会へ「西藏国大藏經目錄」を送稿する。

5月23日には、「ツワンクハバ」伝を書く。

5月31日には、大藏經「インデックス」を書く。

6月13日には、「西藏所伝釈尊入滅考異説」を書く。

6月14日には、「説教改善心理学上より論ず」を書く。

7月13日には、「西藏国問題」を稿了。

8月20日には、「東洋の低気圧」及び「ツワンクハバの異伝」を書く。

8月25日には、「十鑑批判」を書き『佛教』へ投稿する。

これらの論文を短期間に集中して書き残している。

8、婚約・結婚時代

明治30年9月23日、浅草の本山にて石川舜台氏に面会して、藏行きのこと、梵書出版のこと、支那開教のこと、社界問題などについて意見を交わす。南條博士から新門の話を開かされ一旦郷里に帰ってくるよう諭される。南條博士の命を受けて寛は25日、6時に新橋を発ち、汽車普通のため横浜港から朝顔丸に乗船、26日神戸港に到着したけれども強雨のため船中にて一泊、27日になり漸く神戸に上陸する。

30日には水産博覧会を見物。10月1日は水族館を見学。4日、神戸港から隅田川丸に乗船し周防灘を経て門司港、馬関、萩を経由して7日、浜田港へ到着する。

浜田港へは弟の春谷登が出迎える。ここで許婚（婚約者）となる佐々木シヅ（静子）に引き合わされる。翌日有福に行き入湯する。9日帰山する。19日、南條博士から11月中には上京米宅されたい旨の葉書が届く。浜田の佐々木静子宛の手紙を書く。31日静子より手紙が届く。11月6日、浜田へ出て佐々木静子と面会、

共に散歩し婚約後の上京などについて話す。12月2日、南條博士と佐々木静子からの手紙を見て上京を決定する。3日、春谷登と相談。4日、静子へ手紙を出し互いの上京を打ち合わせる。6日に静子が浜田港から上京する。14日、大阪の静子からの手紙が届く。18日、大阪の静子と南條博士あてに返信を出す。18日、午後3時に寛は上京のため出発する。広島までの途中、才河内で泊、松原を経由し加計の香川で泊る。20日、午前七時半加計船着き場から川舟で太田川を下り午後4時半広島に到着する。翌日広島横川駅から神戸駅へ到着。22日、梅田駅へ着き、直ちに江戸堀南通四丁目の本田治七方へ行き、静子と面会し晩は縁日で散歩する。23日午前9時過ぎ静子と共に梅田駅発11時京都へ到着。東山方面へ二人で散歩し、下数珠の池田に投宿する。24日、石川舜台氏を訪問婚約者の静子を紹介する。25日、梅田駅を午前7時58分出发、関ヶ原は大雪、名古屋で昼食。午後5時静岡駅へ到着。大東館に投宿。静子と12時まで話し込み、「ネズミ菓子を引く思ひする」と日記で述べている。翌26日、午後4時新橋駅に到着し、「共に車を雇い南北に別れる」と記述している。寛は南條宅へ、静子は伊井宅へそれぞれ別れて住み込むこととなる。

この頃の寛は南條博士宅に住み込み「毎朝五時に起きて、仏前の掃除をして勤行、梵語や西藏文典の書き出し、書写、南條博士の講座を聞く。午後は、梵本般若心経の研究、夕方は一時間ばかり散歩、夜は、梵文名集経を読習し、午後十時に就寝する…」といったスケジュールをこなしていた。

図書館通いも日課となり、西洋医学書、東洋漢方の両方を研究して單身探検に対する意気込みを感じさせる。

婚約中の寛と静子は東京においては、心温まる交流があった。井の頭公園、忍ばずヶ池などにおいてデートをして互いの夢や希望を確認しあった。百人一首の恋歌を抜き書きした和歌と尺八を吹く寛と日傘をさしている静子のデートの様子を描いた自



静子(20才)の頃



了川(よろがわ)の船着き場(加計町)



東京での寛と静子(M31)の頃

筆の絵が残っている。自らも『阿里野まん満雲枕』に記述されている和歌集などには、この頃の心情が詠み込まれている。

池上にとまる	三一・四・一二
さいた櫻江向嶋	花の主とハ手をとつて
新橋たつて大森に	さらに池上さしてゆく
明保の橋のなが免るハ	羽田の海の鴛鴦が
こころ一つに身はふたつ	まことつくしの水あそび
とふく見ゆる遠げしき	あの雲こゑて外國の
遠き旅路にたつわが身	今宵ふしどこひとつねハ
志ざし已られのなごりをし	羽田の鴛鴦ハ池上の
鐘にゆめをぞさますらん	森の鳥はとくおきて
あさひさし込む明保のの	あまどひきあけをき出でて
西と東にユくる身の	その行末ぞいちらしや

浮雲の たよりなき身の 行末に
いづくの山ニ かかりいてなり

住職となる契約で学資金を拠出してくれた郷里の檀家の思いと英訳經典を世に送り出すためチベット語大藏經を求めて「義父の健在な内にチベット行き」を模索する寛とでは大きな隔たりがあった。結婚させてチベット行きを諦めきそうとする檀家衆の強い希望を受け入れ、義父の姪の佐々木静子と婚約中であった寛を早く結婚式を挙げさせてほしいという母ユクノが一大決心して2月6日に上京し南條博士に強い要請をした。南條博士も寛に帰郷を勧めた。

明治31年4月南條博士宅を暇して故郷の浄蓮寺に帰山した。同年5月28日付けで入籍し、6月29日佐々木静子(20才)と華燭の典を挙げた。浄蓮寺の縁側では寛が静子に習字の手習いをさせていたというエピソード(姪のモモエさん談)もあり、仲むつまじい様子を伺い知ることができる。

しかし、結婚後4カ月目に本山からチベット行きの許可が下りた。チベット行きを理解して婚約以来満一年目を迎える愛妻への贈り物として、寛の誕生時期に咲く「ハクモクレン」と旅立つ10月に実る「柿」の木を浄蓮寺境内などへ記念植樹した。また、境内の図面を書き残しているから寛は中国へ持参したものと思える。

9、探検への旅立ち

結婚後いくばくもない明治31年10月4日早朝、浄蓮寺山門前で親族、檀家衆に見送られ寺を後にした。新妻静子と弟の春谷登は県境の大佐山の麓の「馬ノ原」

まで見送り袂を分かち寛は付き人一名（隣家の大河原清五郎氏）と麦生宅、妙蓮寺に立ち寄り、橋山を経て陸行程八里で加計町へ着き一泊した。翌5日、午前6時に加計から川舟で太田川を下り広島へと向かった。広島までの川里程は18里（新道12里の所）で午後2時半に慈仙寺の鼻の船着き場へ到着した。

『渡清日記』によると横川停車場を午後6時57分の汽車に乗り、翌6日、午前4時59分に神戸駅到着。車にて登の新宅へ向かい6時半着。午後1時2分三の宮発、午後3時20分京都到着。京都では池田屋へ投宿し、渡航許可証を取得する為に約一カ月間ばかり滞在を余儀なくされた。

いよいよ中国へ向けて旅立ちが決定すると、寛は上京して恩師・南條文雄博士や親友に「機が熟せり」と伝え、11月9日には神田宝亭で送別の宴を受け別れを告げた。

10日に東京を立ち、翌11日、京都に着くと本山に向かい東京往復旅費10円78銭、並びに西藏探検費千余円の内三分の一の370円（重慶5カ月滞在費と出京経費在京滞在費を含む）とグライ・ラマ十三世宛の親書を授かり神戸港へ向かい、同年11月12日、神戸港から長崎経由で「西京丸」にて上海へと向かった。

寛は上海の日本領事館において「護照」という上海から四川省までの旅行許可証を取得し、打箭爐（タジェン）へと向かった。長江を遡上するには寛も相当な苦難の連続であった。

明治三十二年の『官話記一号』によると一月十九日宜昌から重慶までの三峡（瞿塘峡・巫峡・西陵峡）のスケッチ52点を描いている。港に寄港している僅かな時間を割いて描いたものと思われる。また『春秋日記』12月3日によると、父が国を出る時に戒めの言葉を「自病ノ短気、カンシヤクヲ起シハセザルカ」と自戒し、「父ノ出立ノトキノ誠言ヲ忘レハセザルカ」と述べている。この父の戒めの言葉が寛の中國大陸大旅行中常に精神的な支えとなっていたのである。

三峡では難（はん）の難所では150間（300メートル）の引き綱を100人ばかりの人で曳きあげる大変な作業である。ある時は曳き綱が切れ下流へと流されることもあり、命懸けの三峡上りであった。また、外国人との乗船を嫌う国民性のために、寛は西欧人と一緒に船を雇い遡上した。

寛の『春秋日記』の「春秋」というタイトルは、寛が20歳の時に「孔子」に関する大西祝氏の「孔子の教」（『日校勝義録』）の論文中「孔子ハ春秋



寛の描いた三峡のスケッチの一部

の末に生れ先王の法度の廢れたるを嘆じ當時の亂世をば堯舜禹湯の治世に…」というところに着目し、「春秋」を採用したものと思える。

明治32年の『飛越關碑記』では表紙に「瀘定橋」をスケッチ（5月10日）し、峨眉県からグルツェンドまでを記述している。この間、本山への上申書を10回（上海～グルツェンド）送付している。5月12日にグルツェンドに到着した寛は1～2カ月滞在して、成田安輝、寺本婉雅両氏の到着を待った。寛は「出発までは、藏語研究の心算に御座候。」と、いたって平常心である。寺本氏は6月27日に到着合流し、成田氏は準備整わず7月8日、二人で出発した。



「傳牌(チャンパイ)」(新語釋)

10、第一次探検（川藏公路コース）

グルツェンドで寛は「傳牌(チャンパイ)」という西藏入国の旅行許可証を取得した。この旅行許可証には、能海寛、寺本婉雅に対して「馬二騎、軍糧府差人一騎、都督府兵士十二騎、ほかに二頭の駝牛および二人の馬夫、合計四騎二夫二駝」を許可している様子が記載されている。

寛の旅のコースは大きく三回に分けられる。第一回は、明治32年7月8日、四川省成都の西方グルツェンドを出発し川藏公路コースを辿った。折多峠付近で寛は、チベット犬に襲われ九カ所も咬まれた。求道僧として護身銃などとうてい持たずに自分を護るのは腕っ節に頼る外は何もなかったのである。巴塘まで漸くたどり着いたが、二人を待ち受けていたものはあまりにも残酷であった。二人は「西洋人」だ。という遊牧民の垂れ込みにより、チャンカの官吏に足止めを受けた。寛がチャンカの糧台に掛け合うも直談判が聞き入れられず止むなくリタイヤすることとなる。それでも寛は諦めずに一人こっそりとモチを腰にぶら下げ「牛古渡」まで出掛けて眼下に金沙江を望んだ。

のぞめども 深山の奥の 金沙江
つばさなければ わたりえもせず

と、無念の句を詠んだ。

巴塘は当時ダライ・ラマ十三世の直轄地であったことから日本人として最初にチベット領へ入国したことになる。寛が弟齊入に宛てた手紙で「巴塘は西藏内地に御座候…」と記述していることから寛は、西藏頭藏（康）古代所屬地であると理解し

ていたのである。

しかし、中央チベットまでは遙かに遠く危険が潜んでいた。一旦、ダルツェンドに引き返し、同行していた寺本婉雅氏は一旦日本へ帰国したが、寛はそのままダルツェンドに止まり入手した「チベット語大蔵經」の翻訳作業をしながら次回の入国手段を検討していた。

11、仏典の翻訳に業績

約半年間、仏典翻訳に没頭して『般若心經』、『無量壽智經』、『弥勒菩薩智願經』、『金剛經』などを梵語、西藏語、中国語、英語に対訳照訳を短期間で実行した。このことは、寛が日本において周到に語学研究をしていた賜と考えられる。また寛は西藏草諺の書及び「千殊爾」、「丹殊爾」の翻譯經西藏を目のあたりにして西藏の文化水準の高さを正しく評価している。

明治33年5月16日付、第19回本山宛の「上申書」によるとダルツェンドにおいて探検に対する前後策を講じていたが次の様な決定をした旨「上申書」に書き記している。

(前・中略)

諸疑題ハ達ニ小生ヲシテ左ノ決定ヲ致サシメ候

第一 青海ヲ往テ進藏ヲハカルベシ 荷物並ニ旅費ノ半額ハ当地ニ遺シ置キ出発シ

第二 青海策若シ成ラズレバ再ビ当地ニ引可ヘシ萬題中ノ第一業ヲ試ムベシ 第一業タル小路進藏到底望ミナリト

第三 冬期好時機ヲ以テ雲南ニ出テ第二業ヲ試ムベシト依テ以上実行ノ為 明日當地出発新決定ノ論ニ上リ候就再ヒ成都ヲ經甘肅蘭州ニ至リ青海ニ至ル豫定ニ御座候 或ハ序ヲ以テ松藩内地ニ於ケル喇嘛寺ニ西藏黄教新教ノ開山誕生地ヲモ訪問致度存候

二白、過日寺務所内南條先生宛金剛經西藏文葉並ニ譯本 計四冊発送致置候 以上早々

五月十六日 敷在打箭炉 能海

本山寺務所 布教局御中

2次探検青海ルートが不可能ならば、3次探検を雲南ルートにと示唆する「上申書」である。

12. 第二次探検（青蔵公路コース）

第二回探検は、明治33年5月17日グルツェンドを出発、成都、長安を経て、甘肅省の西寧に達し、青海路をタンカルに着いた。途中寧夏回族自治区の六盤山を経由して蘭州に至る間の寛の現地の探訪論文「甘肅論」では「…地理、沿革、風俗ヲ知ラント欲スルノ人多カラント信シ、実地ニ見聞セル所ヲ報シ愚見ヲ附記シテ、此論ヲ草スルナリ。…」と述べ地理、歴史、政治、宗教、風俗、人情、言語、商業、農業、物産など62項目にわたって記述している。蘭州からは、故郷の友人へ農作物の種子（「洋麦」・「平豌豆」・「甘肅胡麻」・「菽米」など4種類）を送り蘭州の気候と似通っているのを故郷で栽培してみてもどうかと述べている。尤も寛は農業にも関心をもっていた。

『在渝日記』では、「支那の農業」、「西藏の農業」、「陝西の農業」、「甘肅の農業」など寛が観察したままを記述している。『西藏地誌略』では漢口、打箭爐、河口、裏塘、巴塘、中甸、維西庁、チャンカ、乍了、察木多など通過を予定した地域を詳しく記述している。『丙第五号』では、グルツェンドにおいて「チベット仏像四十三軀」のスケッチと解説を記述している。また『雨夜物語』では、中国の民話「獅子と鯨の話」、「狼と蜻蛉」、「猿と駱駝の話」、「猿と人間の話」などを採録している。これらの記述を見ると、寛は並な探検家ではないことが判るのである。

タンカルで寛はチベットへ如何にして入国するかを模索していた。当時のチベットへは二つのルートがあり、一つは青海の南方に行く「官路」と称する路。もう一つは、青海の北側に行く「商隊」、または「西藏巡礼」の通路があった。

この商隊の通路は3カ月の食料の携帯を要した。寛は8月に、この北側から行く商隊に紛れ込むつもりで馬に乗りトンカルまで行き進蔵計画を模索中にタンカルの宿に預けていた旅費、旅装品が留守中に盗難に遭遇し金品を奪われた。止むなく断念して蘭州から回教徒地域を見聞するために蘭州を経由して重慶まで帰った。

能海の旅は、ただ一直線の急ぐ旅では無いのである。仏教寺院がルート上にあれば何十キロ隔てていても、立ち寄り、大蔵經典の有無の確認などをする作業を一貫してこなしていた。この為に、よほどの事が無い限り、同じルートを通過することを避けていたのである。100年前の中国の各省府の姿が62項目にわたる記述「探検旅行記（見聞記録）」が見直されているのである。



「第5号」 寛の日記（M32.9.9）

13、第三次探検（雲蔵公路コース）

しかし、日本に帰還する事なく第三回の探検に貴陽を経て雲南省路をとった。

「今や極メテ僅少ナル金力ヲ以テ深く内地ニ入ラントス、歩一歩難ヲ加ヘ前途
氣遣ハシキ次第ナレド、千難万障ハ勿論、無二ノ生命ヲモ既ニ仏陀ニ托シ、
此ニ雲南ヲ西北ニ去ル覚悟ナリ。」

一命を投じ求道した青年僧の行方は34年4月18日付の南條博士に宛てた信書と
妻静子に宛てた4月21日付の鄧川州（大理～麗江間）からの音信をもって全てを
絶てしまった。

南條博士から教えを受けた梵文による『無量寿経』、『阿弥陀経』、『金剛経』、
『般若心経』など主たる經典はグルツェンドで入手して、4カ国語に翻訳も終え目
的の殆どを達成しながら、なお身命を尽くし西藏探検を継続実行した寛は、大谷光
瑩法主から預かったダライ・ラマ十三世あての親書(1824・45寸)に対する返書を戴
くことが人間能海寛の「信後の行」の身の処し方であったのだろうか。

14、おわりに

現代の我々に最も必要な、「夢とロマン」を具現化する術を彼の生涯に互る生き
ざまが私たちへ今なお語りかけてくれるのである。

能海の生きざまは、現代の不透明な時代を生き抜く指針として、ものの考え方、
発想力に大いに触発されるものがあります。もしも「能海学」として位置付けるこ
とができるならば、能海の探検行は後世へ語り継がれるでしょう。

能海の生涯に互って書き残した論文、国内旅行の紀行文、中央アジア探検旅行記
等をもとに地理、歴史、政治、宗教、風俗、人情、言語、商業、農業、物産など6
2項目にわたる情報が、会員研究テーマに幅広い研究ジャンルを提供しているの
である。知的国際交流を推進して行く上で不可欠な研究テーマである。

【参考文献】

この項に使用した「了川の船着き場」の写真(P42)は加計町の佐々木敏夫氏に提供いただきま
した。そのほかの写真等参考文献は全て「金城町歴史民俗資料館」に寄託展示されているものを
使用しました。また、能海寛研究会定例学習会(2021年)において著者が発表したものを総合的
にまとめたものである。

第1回定例学習会「能海寛の足跡をたどって①」＝幼年期～青年期の歩み＝、

第2回定例学習会「能海寛の足跡をたどって②」＝探検家としての歩み＝、

第11回定例学習会「能海寛の青年期について」

第13回定例学習会「『甘肅論』に見る能海寛の中央アジア大旅行の意義」

第14回定例学習会「『渡清日記』に見る旅立ちの記録」＝故郷から上海まで＝

第16回定例学習会「『官話記』などに見る能海寛の行動記録」＝上海～三峡～重慶＝

第20回定例学習会「能海寛の婚約時代について」

第22回定例学習会「『口代(くぐり)』に見る探検決意について」

能 海 寛 略 年 表

年 号	月	事 項
明治 1	5	18日、島根県那賀郡波佐村長田（金城町長田）真宗大谷派天頂山浄蓮寺にて父法幢、母イクノの次男として誕生する。
8	8	16日、父法幢没。父の生家である広島県山県郡刈屋形村（芸北町）の専光寺で養育を受ける。
10	6	12日、広島小教校（進徳教校）に入学する。
12	10	28日、京都東本願寺にて得度する。
14		養育先の専光寺から浄蓮寺に帰り、法務の手伝いをする。
15		夏の間、石見学場（明清寺、浄慶寺などに16、17、18、22年共）に出る。
18	9	9日、専光寺住職円海師に進路の相談をする。16日、広島教校へ入学する。
	12	広島教校が京都教校へ合併の時退き、22日、御坊に滞在し越年。
19	1	19日、郷里に帰り、上京の支度をする。31日、京都着。
	3	京都西本願寺普通教校高等科へ入学する。東寮3号室（4名）入寮。
	6	コレラ病流行し休校となり、一時帰郷する。
	9	9日、再び上京する。15日、普通教校へ入舎する。西寮に入寮。
	10	10日、「反省会」へ入会の為に「誓約書」を出す。
	10	23日、恩師・南條文雄博士の意志を継ぎ能海寛はチベット探検を表明する。西寮の同意・牧野信次郎より「活眼」の激励文をもらう。
	11	23日、「ニュー・ナショナル第三読本」の英文を日本語訳する。
20	3	3日、普通教校本科初年級へ編入される。 小栗栖香頂氏より『論教』を学ぶ。
21		哲学館の館外員となり、2年間にわたり哲学、英語、梵語を学ぶ。
	7	13日、親鸞の聖地摂津吹田村へ避暑。
	12	25日、大学林例が発表される。
22	1	28日、文学寮本科二年甲生へ編入となる。
	3	11日、大学林文学寮と内学院の紛議中に併せて学資金欠乏につき、帰郷し、向こう4年半の学資金づくりに奔走する。
	5	帰省中の寛に文学寮から徴兵に伴う補充員規則により「12月までは寄留地（京都）を去ってはならない」という指示書が届く。
	8	「春秋日記」を書き始める。
	9	5日、檀家と後住職たる約束で、学資金(270円)を頼み『学資金募集に付訂約書』を檀家と交わす。
		これが後に『予が一生不自由なる根元なり』という。
		上京して、京都市下京区西中筋小路上ル、若林方へ住み込む。
		14日、大学林文学寮の北寮6号室（5名）入寮。
		22日、京都で河口慧海氏と「英文会」のことで面会する。
	12	文学寮を退学する。（12月まで寄留地を離れることを規制されていた）
		17日、上京し、友人の西依、松島と東京三田四国町田中きん方へ住み込む。

年 号	月	事 項
23	1 1 2 3 6 7 11 12	23日、芝区三田豊岡町65番地越溪逸方へ転居。【春秋の日記】 29日、英文日記【Wisd & Mercy】を書き始める。 慶応義塾へ入学（豫科二番）。W・ウエストンより物理(クイブ)の授業を受ける。 30日、E・アーノルドより漢詩(歌)の指導を受け、英文詩を蔵く。 三田北寺町1番地西蓮寺白山宗英方へ転居。 東北紀行をなす。【夏期旅行日記】 5日、「英語夜学会」へ入学する。 慶応義塾を退学する。
24	1 7	慶応義塾から哲学館へ転入学する。【講義口述録】 哲学館普通科を修了する。
25	7 7 7 8	哲学館普通科を修了する。 富士山単身登山をなす。 哲学館高等部下級を修了する。 東京南島紀行（伊豆七島めぐり）をなす。
26	7 8 11	哲学館高等部上級を修了する。（10年後に哲学館講師の称号を受ける。） 7日、郷里の浄蓮寺に帰る。 論文『世界に於ける佛教徒』を自費出版する。
27	1 2 2	3日、密かに遺書『口代(くちだい)』にチベット探検の決意を書き置く。 27日、『口代』に自分の髪を切り添え「…業ノタメ死セバ、遺体ト思イ御葬送ヲ仕乞。」と決意する。 「波佐倶楽部」の結成の準備をすると共に郷土史の研究をなす。
28	7	益田市沖の高島へ渡り「寺小屋」を開設し僻地教育の灯をともし。 高島での和歌七首「高島の漁火と同島にて」あり。【石見湯高嶋記】
29	3 5 5	上京して南條文雄博士宅に寄留し、梵語を研究。日夕は必ず善隣書院の宮嶋大八氏において支那語（中国語）を学習す。 7日、本山源美契縁執事あてチベット探検の嘆願書を提出する。 23日以降、短期間（3カ月間）に精力的に7件の論文を書く。
30	10	郷里に帰り、佐々木静子と婚約し、12月末に同伴上京。寛は南條宅へ、静子は伊井家へ、それぞれ住み込む。
31	1 4 6 10 11	母イクノ上京し、寛の結婚を南條博士に依頼する。 南條博士が帰郷を促す。寛は、京都まで南條博士に同行し、その足で帰郷する。 29日、佐々木静子と結婚する。 本山からチベット行きの許可がおりる。結婚後いくばくもなくチベット行きを決心し、5日、浄蓮寺の檀家一同に見送られ、能海静子と県境で袂を分かち。一旦、京都に留まり、本山にてチベット派遣費の申請と渡航許可で日数を費やす。【渡清日記】 6日、東京へ向かう。9日、神田宝亭にて南條博士、友人等17名に送別の宴を受ける。

年 号	月	事 項
3 1	1 1	1 1日、本山大谷法主からダライ・ラマ法王13世あて親書を授かる。服と派遣費を受取る。 東京往復10円78銭、並びに西藏探検費1千余円の内3分の1、370円(重慶5カ月滞在費と出京経費在京滞在費を含む)を受取る。
	1 2	1 2日、に神戸港から西京丸にて中国へ向かう。16日、上海着。 4日、宜昌着。7日、三峡を船で遡上するとき、で52カットのスケッチを描く。【官話記1号】
3 2	1	第一次探検に赴く。7日、四川省重慶着。【春秋日記】
	4	成都着。
	5	打箭鏢(康定市)着。【飛越關碑記】
	6	四川の草鞋二足(50文・80文)を日本へ送る。
	7	寺本婉雅氏と同行出発。【西藏国地誌略】
	8	裏塘着。【第三号】
	9	巴塘着。(この時はチベット領であった。)
		27日、金沙江(牛古渡)で 『のぞめども 深山の奥の 金沙江 つばさなければ 渡りえもせず』 の和歌を詠む。
3 3	1 1	寺本氏はいったん日本へ帰国す。能海寛は打箭鏢に留まり仏典の研究生活に入り、チベットのプンツォクリン寺版のツォンカンパによる『秘密集会タントラ』の「五次第照明燈」をはじめとする広大無辺のチベット語大蔵經を世に送り出すことに成功し、4カ国語に翻訳する。【丙第五号】
	3	「能海寛直筆(3セツ)西藏地圖(頭藏・前藏・後藏)」を描く。 『般若心經』西藏文直訳梵藏漢対照訳、『無量壽經』直訳、『弥勒菩薩聖願經』直訳、『金剛經』直訳などの業績をなす。【在論日記】
	5	第2次探検に赴く。17日、打箭鏢を出発。27日、成都着。
	6	27日、西安府着。【進藏朝佛記】
	7	14日、寧夏回族自治区の六盤山を通過。23日、蘭州着。
	8	甘肅から日本へ農産物の種子(甘肅胡麻・洋麦など)4種類を送る。 8日、西寧着。22日、青海省の丹噶爾の宿に荷物を預けチベット入りを模索し商隊に紛れ込むために冬科爾まで馬で出掛けた留守に荷物を盗まれる。やむなく、引き返す。(この時も青海省はチベット領であった。)
	8	23日、丹噶爾を発ち24日、西寧府に着。岷州。順慶府経由。
	1 0	重慶着。
3 4	1	4日、「旅行行程地圖(部略・部略)」山・河・地名・道を描く。
	2	第3次探検に赴く。重慶発貴陽着。【雨夜物語】
	4	雲南省を経て大理府に着。
	4	18日付け南條博士あて手紙を最後に行方不明となる。(南條博士に宛てた最後の音信の日付をもって寛の命日としている。)
		寛は、これまでに語学研究録や旅行行程記録、チベット語大蔵經、仏典仏具等を南條博士の元へ送り届けていた。
		大理府を立つ時に、日本領事館に荷物を預けていた。
		報知新聞(M38.7.23H)によると4月21日、麗江の南方部川州から妻静子あて最後の書簡が存在していたことが判明している。
		チベット領内には二度も足を踏み込みながら、なお中央チベットをめざしたのは、ダライ・ラマ13世からの本山の大谷法主への返書を持ち帰る責任感が災いしたのであろうか。「不惜身命」の果敢な勲の生涯であった。

《隅田正三作成》